

グアテマラのマヤ系先住民と荒蕪地

現地調査の成立と「伝統的共同体」の分節に関する覚書

中田英樹

Abstract

This paper takes as its case of study the south area of the Atitlán Lake in the mid-western highland of Guatemala. In the pre-Colombian period, one of the Mayan indigenous ethnics, Tz'utujil people, had developed a "Kingdom" and its southern part reached to the south coast as the wasteland, *baldío*.

Since the late 19th century, the government has expropriated this *baldío* in order to be converted as the productive element of capitalism. In the first part of this paper, the historical changes in this area are traced giving a primary focus on the relation between the highland area and the lower *baldío*.

After, it will be analyzed how this history has been described in the anthropological studies under the US academic research started at the 30's. One local young intellectual was employed to help Dr. Sol Tax for his fieldwork to write "Penny Capitalism," and after to go to the south shore to start fieldwork in the "primitive" world, Tz'utujil. The second part analyzes his field report concerning his role as the intermediate for establishing the anthropological fieldwork.

Keywords: Wasteland (*Baldío*), Maya, Community, "Moral Economy Debate", Fieldwork

第1章 問題設定と本論の課題

1 タックス

ソル・タックス Tax, Sol. 1907年生まれ1995年没。アメリカ人類学会の元会長で、『現代人類学 *Current Anthropology*』の創始者。「先住民意志宣言 Declaration of Indian Purpose」で知られる北米先住民のシカゴでの会議 (AICC) のコーディネーターなど、先住民運動にもインテリとして大きな影響をもたらした。

中米グアテマラの中西部山岳地帯にアティトラン Atitlán 湖という大きく綺麗な湖がある。1935年に北米先住民の親族関係に関する博士論文を完成させ「一人前」の学者となったタックスは、ワシントン・カーネギー協会に職を得てその研究計画に参加、この湖畔のマヤ系先住民たちを調査しはじめる。

1953年、彼はその湖畔にあるパナハッチェル Panajachel という村を対象に、一冊の本を（彼が後に研究局長となる）スミソニアン協会から公表する。この『1ペニー資本主義 Penny Capitalism』¹⁾

とは、パナハッチェル社会を経済合理主義的解釈一本で説明仕切るものであった。

機械も工場も消費組合も同業組合もない。各々個人が企業体であり、自らのために懸命に働いている。小さな単位だが貨幣もあり、背中に荷を背負って運びはするが交易もある。自由な起業家、非人稱的な市場や競争　これらがその農村経済には存在するのだ。しかし生産に機械が用いられていないように、商売はすべて現金取引である。貧乏人と金持ちの差とはつまり、手か機械か、現金か掛けか、物売りか企業かの違いなのだろう。そしてこれらすべてが、「近代的」な経済と原初的 primitive な「発展途上」の経済との違いなのだ²⁾。

このパナハッチェル社会の叙述は、最も早い時代における途上国周縁農村の現状として、後の経済学　とりわけ開発経済学　において、例えば同じシカゴ大のシュルツ Schultz, Theodore W. の「効率的だが貧しい仮説 efficient-but-poor hypothesis」に、そしてここからステイグリッツ Stiglitz, Joseph E. が最貧国 LDC を理解するための下地になったといわれる³⁾。

すると『1ペニー資本主義』を、途上国周縁の「未開社会」に調査に出掛け、そしてそこでも先進諸国と同じ近代資本主義の社会原理が存在することを「発見」した、草分けの一冊としたくなる。日本でもそのような位置づけで一部翻訳されたこともある⁴⁾。

2 閉鎖的集合農民共同体

1930年代後半にタックスがパナハッチェルを調査する一方、同じ計画のもと、米国地理学者マクブライドは湖南部の海岸平野部を、中米にタックスを導いた同じシカゴ大学の先輩教授レドフィールド Redfield, Robert は、彼のアテンドでパナハッチェルから近いパロポー San Antonio Palopó やアグア・エスコンディーダ Agua Escondida 村を調査していた。

一方で1957年、ウルフが一本の論文を発表する⁵⁾。

まず彼は、マヤ系先住民共同体の構成員をおしなべて「農民 peasants」であるとする。そしてさらにその「農民」の定義を、土地を有効に活用しつつも、営利のための商売としてではなく生活の手段として営んでいる農業生産者としている⁶⁾。もっぱら彼の関心は、対象とする先住民社会の共同体的なまとまりに注がれる。とりわけ彼は、次の特性に注目する。土地所有：共同体内の土地は個人ではなく共同体が保有する。共有地の所有者たる共同体の構成員に、外部者は排除される。共同体は宗教的儀礼を維持しており、この儀礼への参加もまた共同体の構成員に限定されている。この儀礼に財を供出することが共同体内で尊敬されることにつながる。金持ちは敵視され、貧乏は徳とされる。これは構成員に儀礼への参加を通じて散財させ、個人的な財を突出して蓄積させないことに貢献している。散財された財は、貧しい構成員へと再分配される。またこの閉鎖的共同体は、対外的には部外者を排除する一方、外部からの財や考え方が流入することを阻止する傾向にある。

グアテマラ先住民ももちろん含むメソアメリカのマヤ系先住民社会が、「閉鎖的集合農民共同体」という先進社会の原理とはまったく異なったそれで説明される。後にこれが、スコットの「モラル・エコノミー」概念のモトネタのひとつとなり⁷⁾、ポプキンにおいて格好の批判対象となったのはいうまでもないが⁸⁾、メソアメリカのマヤ系先住民村落にも現地調査を通じてよく知っているという⁹⁾ウルフが、1930年代後半から発表された同じ北米人類学界でのタックスらに

よる先の諸成果と無関係だったとは思えない。ウルフの見いだした「閉鎖的共同体」もまた、この1930年代後半からのアティトラン湖湖畔社会の現状報告が関係している。

3 媒介者ロサーレス

さて、調査に入ったタックスらの一行は、1936年、パナハッチェル生まれの先住民グアテマラ人口サーレスと出会う。首都で教育を受け、以前から地元先住民文化に詳しく、学校の先生でもあった地元のインテリと言えようロサーレスは、タックスらの計画に興味を持つ。そして「民族学者になるには技術的訓練が足りない」とタックスに言われ彼らの調査助手として訓練を積み始める¹⁰⁾。

ほとんど二年間に渡って、ロサーレス氏は私とパナハッチェルで作業をした。民族学的な地図や社会学的なセンサスをつくったり、親族関係のシステムや社会構造を分析するための家系図や他のデータを収集したり、民話や信仰、他のさまざまな文化に関する諸相 技術、経済、共同体間での諸関係、政治宗教組織など に関する情報を広範に入手していた [Tii-iii]

二年後の1938年、タックスらに「機は熟した [Tiii]」と認められたロサーレスは、対岸に位置する「未開」のツトゥヒルTz'utujil村落のひとつ、サン・ペドロSan Pedro La Lagunaの調査に単独で入る。成果はシングル・スペースで千ページの報告書となり、現在ではマイクロフィルム（1949年公刊）としてシカゴ大学に眠っている¹¹⁾。

本論はこの報告書の分析をひとつの柱とするのだが、話を先に進めよう。1968年、タックスが編者となった『アティトラン湖の諸村落』という本が、追加調査を加えてグアテマラで出版される。いわば湖畔エリア調査の集大成とも言えよう、当時のグアテマラ絡みの人類学者が名を連ねる。サン・ペドロを担当したのはポールである¹²⁾。そこでの説明は明確だ。

かつて昔〔中略〕、村落行政と宗教は融合していた。その〔村落社会〕構造〔のヒエラルキーの上位〕が目指されるため、〔村の〕秩序や風格、神々 santos や伝統は尊厳されていた。男たちは時間を割いても報酬を受け取っていなかった。それはサン・ペドロ人としての義務であるとされていたし、公共の目が意識されていたし、賦役にともなう儀式は畑での一本調子な労働に爽快な心地よさを与えていたからである。人生の目的は明確だったし、その歩み方も十分に決まっていた。〔断りない限り本論傍点および〔 〕部はすべて中田〕

4 本論の課題と方法

最低限のことを繰り返す。1930年代後半に、グアテマラのマヤ系先住民を対象とした近代人類学は形を成し、その中心には湖を眺めるタックスがいた。対岸サン・ペドロからの報告書を同時に見ながら、彼はパナハッチェルの村を描いた。それは後年に広く流布したいわゆるポプキン流解釈のもっとも初発の大作であった。そして一方でこれら諸成果を参照としながら、ウルフは「閉鎖的集合農民共同体」をこれら社会に見いだした。それは後年の「モラル・エコノミー」の礎となるとともに、その出自の地ではポールのサン・ペドロ現地調査の下敷きとなり、かつてのサン・ペドロがそのようであったとされた。この一連の説明の末にあるのは、社会科学によって証されたひとつの歴史である 伝統的共同体から資本主義社会へ。

第二に関しては、ロサーレスによる報告書をおもに使用する。

それを踏まえて、再び冒頭の学の問題に戻る。その際に、タックスから新従属論草分けのひとりフランクへの思想的親近性を補助線として援用する。

第2章 グアテマラ・コーヒーの発展と先住民村落

1 山間部湖南と南部平野部

以下、論をアティトラン湖湖南に絞る。湖南を通る山脈を南に越えれば、後は海岸までなだらかな斜面が広がる。植民期以前には、湖南一帯に、ツトゥヒルの人びとによって王国が築かれており、その南端は南部平野まで達していたという¹⁴⁾。

グアテマラ司教区を新任の大司教 arzobispo が、1770 年前後に国内を旅したときの記録がある。この時すでに、サン・ペドロはひとつの小教区 parroquia の行政中心地 cabecera であった。サン・ペドロの位置する高地湖畔は「収穫がきわめて乏しい」ために人びとは「南部サン・アントニオ San Antonio Suchitepequez で商売を展開し、生計を支えている」と記されている¹⁵⁾。そしてこのサン・ペドロ教区に南接するサン・アントニオ教区では、逆に果物なども豊富に収穫できる農業的好条件にあるのだが、トウモロコシとカカオが栽培されている程度で、あまり利用されていないようだ。

十九世紀末よりグアテマラ政府は、その南部の海岸部を、綿花やサトウキビそして何よりもコーヒーの大農園として利用しようとしてきた。それまでは大部分が疎らに家の建ち並ぶ寂しい地域であり¹⁶⁾、多くが境界を持たない未開墾で無主の土地、つまり荒蕪地 baldío として放置されていた。

2 コーヒーの導入と南部の発展

1870年代からの近代主義政府は、旧支配階層が貢納のために僅かに利用するのみのこの地を私的所有形態のもとでの生産要素にしようと、徹底的に接収し個人売却した。逆にサン・ペドロ位置する山間部は結果的に放っておかれた。大規模生産には適していないし、南部大農園が必要とする季節に応じた柔軟で安価な労働力を、山間部先住民村落は再生産したからである。

この二〇世紀をかけて、強くしっかりと持続したこの国家規模での運動によって、上記の地理的な空間配置はどのように変化したのだろうか。

今日での南部チカカーオ Chicacao 市およびその周辺村であるクツァン San Pedro Cutzán を例に取りたい。「王国」の名もなき辺境地であったチカカーオは、コーヒー経済の興隆とともに1889年、チカカーオとして集落を形成する¹⁷⁾。クツァンも同様、1890年頃にサン・ペドロの周辺村落として形成されている。このクツァンの住民の大半がサン・ペドロからの移民であることは、サン・ペドロでは広く語り継がれている。マクブライドの報告にも、サン・ペドロの移民でクツァンができ、そこの人びとの暮らしとは、さまざまな果物を生産できる家屋敷地内農園に家畜も飼い、そして高地サン・ペドロ社会と広く交流があったと記されている¹⁸⁾。ツトゥヒル語の訛りもこのクツァンのみが、サン・ペドロのそれと現在でもほぼ同じである。

3 カブレラ独裁政治期とホルヘ村長

サン・ペドロの人びとが経験として語るなかで、クツァンが最初に出てくるのは1920年代である。1898年よりグアテマラは、カブレラ大統領の独裁政治下にあった。しかし、第一次世界大戦からのコーヒー世界市場の混乱に加え、1917年の大地震、1918年の大流感など、度重なる政治的問題を乗り越えず1920年に政権は崩壊する。

このカブレラ期とまったく同じ年代で、ホルヘという（仮名）村長がサン・ペドロで暴政を展開する。「サン・ペドロの人びとを南の大農園で働くように売った」「貧乏人がまず生け贄にされた」。この暴政絡みでクツァンが登場する。「だから人びとはクツァンに行った」「大農園の悪い扱いに苦しむ貧乏人は向こうに土地を持って逃げた」¹⁹。だからクツァンは、サン・ペドロの人びとが強制的に働かされる大農園がある地で、一方でサン・ペドロの人びとの避難地でもあったことが伺える。

4 南部荒蕪地

グアテマラ近代史において、山間部の先住民が南部平野へと降りるとき、それは山間部の共同体を去り季節的にはあれ大農園の資本主義労働者になることを意味する。一般的傾向としては間違いない。しかし、南部平野に直接的なアクセスをかつてから持っていた例えばアティトラン湖湖南エリアの諸村落などは、非常に複雑である。例えばクツァンなどの、南部に位置するが大農園地帯の周縁であるような地域には、自給自足の農地も広汎に残っていたのだ²⁰。筆者のサン・ペドロでの聞き取りでも、多くの者が南部でトウモロコシを耕していたと述べているし、資料でも多くが大農園で働くとともに、その農園の端の一筆を自給用に借り入れ、支払いをトウモロコシの収穫でおこなっていた、とある²¹。

さらに注目すべきは、「クツァンとかあっちの方だ」としかほとんど説明されない、南部のパマシャンPamaxán、モカMocá、マルーカMarucaといった、まるで“その他周辺”としての意味内容しか持っていないように映る地域である。

例えばパマシャンは、十九世紀末からのコーヒー導入圧力下に曝されて以降、あまりにも点在する二村間での係争の土地として記録に残っている。「係争の土地を再計量する。“サン・ペドロのパマシャン”“サン・ホアンのパマシャン”“サンティアゴの”として人びとに語られ紛争の原因になっているからだ」といった具合である²²。それは今日の市町村配置では、空間的に不可能な境界を持った地に思える。

国家発展の資源として政府に吸収され私的所下へと切り崩された記録もある。1881年には、モカとパマシャンの土地25カバジェリーア（約340ha）これは山間部ではあり得ない面積規模であるが、政府によって吸収され個人へ譲渡されている（法令第352号²³）。その拡大を求める請求が、1885年にも再度承認され、さらに土地が特定個人へ譲渡されている²⁴。一方で、サン・ペドロの人びとが申請していたパマシャンのサン・ペドロへの解放が、平面図にあった10カバジェリーアについて認められている²⁵。

両親はかつて相当な土地をパマシャンに持っていました。政府がそれを取り上げ、どこから来たのか解らない人にそれをあげてしまったのです。その代償としてモカに1カバジェリーア〔約13.5ha〕の

土地を与えましたが、サン・ペドロでは同じような家族が五つありました。（サン・ペドロ、先住民、男、1911年生）

気候など農業条件に恵まれ、問題を抱えた山間部村落民を受け入れる避難地ともなり、よってさまざまな地域での摩擦の火種となり、その境界線を固定化せず、時には政府によってもいとも簡単に接収される。こうした誰にも開かれたアクセスと、そのアクセスの目的の自由度とは、どうやら私たちの共有地概念とは異なるようだ。

サン・ペドロの共有地 *terreno comunal* が、〔クツァンの他にも〕海岸部にありました。マルーカといえます。私もまたマルーカに土地を持っていて、証書を持っていましたが、〔現在ではもう訪れなくなり〕現地の誰かと問題を持ちたくないで、〔現在では〕破棄しました。それら土地は、代々大昔から受け継がれてきたものでした。〔現在のサン・ペドロの五つの名家は〕海岸部に土地を持っていたのです。私にもそれら起源はわかりません。（サン・ペドロ、先住民、男、1930年生）

サン・ペドロの人たちがたくさん土地を持っていたところがありました。クツァンといえます。サン・ペドロの人たちは〔それら土地を〕買ったではありません。昔、土地はすべて共有だったからです。誰も、どの土地に対しても証書などは持っていませんでした。だから、土地がほしければ、その土地を取ることができたのです。〔中略〕しかしながら、誰一人、買ったものはいませんでした。（サン・ペドロ、先住民、男、1920年生）

5 1920年代

グアテマラ農業史の代表作ともいえる『グアテマラ農村』（1994）において、マクリリーが最も力を込めて論証したことのひとつとは、国内労働市場における決定的な構造転換が、この20年代に起こったことである。つまり世界的な情勢不安の直撃を受けたグアテマラ・コーヒー経済の不況は、一気に市場を労働力の供給過剰の極へと導いた。経営収支はまったく計算予測不可能で、農園の価値は暴落し、農園主は現金で賃金を払えず、ツケにしたりカットしたりした。一方で、山間部の農村人口は、19世紀末から著しく増加していた。もはや山間部の先住民たちを、いわば強制的に前借りさせ南部農園へと動員する必要性は激減した。これは先住民が「教化」され国家に同化されたとかいう意味ではない。もはや自分から以前よりもっと少ない現金収入でも働きに動かなければならない程、生活が追い込まれたのだ。

サン・ペドロ位置する湖南エリアが、どれほどこの動向とシンクロしたかはわからない。ただ、カブレラ政権期にその末端で暴政を敷いていたホルヘ村長が同じ1920年に退却し、そして逃げて南部の河で溺死して犬に食われて発見されたという²⁶⁾ 粗末な物語として時代を閉じられた以降のサン・ペドロは、明らかに根底から変化を遂げようとしていた。

そのひとつが、ゴンザレス（仮名）という新たなタイプのリーダーである。

6 ゴンザレス

まずゴンザレスはカトリックではなく、サン・ペドロで初めてのエヴァンヘリコ〔福音主義派プロテスタント〕であった。いわゆるコフラディア *cofradia* がサン・ペドロにもあった。つまり、カトリックに固有の綺麗なヒエラルキーの権力構造と、村の社会的権威のヒエラルキーのそれが重なったものである。彼は後年、エヴァンヘリコでこのヒエラルキーのピラミッドを登

りつめる、サン・ペドロで初めての人間となる。

1925年の暮れ。ひとつの法令がサン・ペドロに適用される。村内のあらゆる土地を対象とした、測量・登記制度の導入である²⁷⁾。

そしてこのゴンザレスこそが、その翌1926年に始めてサン・ペドロにコーヒーを持ち込んだと資料は記す²⁸⁾。彼によって持ち込まれたコーヒーは、その後数十年かけて浸透し、80年代にはほぼ村内全域で栽培されるようになった。九割以上が現地先住民によって構成される村落でこれほど村内に深くコーヒー栽培が浸透しているのは、グアテマラでほぼ唯一ではなからうか²⁹⁾。そして、サン・ペドロにおいてこのコーヒー農園は、かつてのトウモロコシ農園であった。若干の栽培適合海拔には差があるものの、水まきや要求される栽培知識の自由度などさまざまな農業条件において似通っている。ただ唯一の違いがある。単年性と多年生作物の違いであり、コーヒー農園の開墾には、土地の登記が絶対条件であることだ。

ロサーレスの報告書を少し先取りしよう。タックスの指示で彼はサン・ペドロの有力者のリストを作っている。そこにゴンザレスの名前も出てくる。

約45歳。経済的には中程。スペイン語の読み書きができるため、サン・ペドロとサン・ホアンにて秘書を経験済み。エヴァンヘリコの信者で、通訳官 *Interprete*、地区副代表 *Sindico 2o.*、そして村長 *1r. alcalde* を経たのみである。エヴァンヘリコで村の第一人者になった唯一の人物で、村の当局が何らかの問題を解決する際に、繰り返し助言や助力を求められる人物である。会議での重役たちの席に着くことは決してない唯一の人物で、司法の当局 *escribientes* にいつもいる。そこへさまざまな同教者 *correligionarios* が相談にくるのである [R740]

ゴンザレスが先の25年の法制定をめぐる村内行政にどれほどタッチしたかは、この38年の資料ではわからない。ただ、現在では村内の一等地に広大な土地を持つ名家である。ただこの報告書の記述からは、彼はそれ程ムラで権力的な基盤を持っていたとは思えない。むしろ新たな村内権力集団を形成しつつあったように映る。

7 南部との切断

1934年、チカカーオを含むエリアー帯が、ソロラー県から切り離され南部スチテペケス県下に統合される³⁰⁾。先の登記とあわせて考えなければならない。村内の全土地を登記するということは、村内という領域を完全に定義し塗りつぶすことでもあるからだ。

現在のサン・ペドロ村内にも共有地と呼ばれるものがある。それはオキマリの言い方でいえば、伝統的な先住民がしばしば明文化されない慣習でもって維持している、私的所有の認められないものであり、村の公役・雑務を果たした者がその一年の期間、村内のその僅かな土地を単年性作物の栽培に限って占有することが許される土地である。しかし少なくとも筆者の聞き取りにおいて、過去の経験でこれに大きく頼ったことがあった者はほぼ皆無であった。南部の綿花、サトウキビ、コーヒーの大農園へ、そして南部の自給トウモロコシ用の一筆へ、そうした経験はほとんど誰もが強調したというのに。

マクブライドはこの切り離しを「遅かった³¹⁾」と述べた。しかしこの修辭は、十九世紀末の南部地域の経済的成熟と、この1934年の「宗主」山間部からの独立とのタイム・ラグを前提と

している。それは南部からの視点である。だがこれを山間部サン・ペドロのほうから眺めて欲しい。ならばそれは、村内を近代法で整理し、コーヒーを導入する条件を整え、南を切った歴史を歩もうとする、まさにその時だったとはいえないか。

したがって冒頭に掲げた本論第一の課題に対する結論は次の問いかけとなる 1925年の登記に継ぐ村内領域策定の完結と、1934年のソローラー県下サン・ペドロ村からのチカカーオら南部の切り離し この二者が近代法体系であることを繰り返したい によって、いかなる共有地がサン・ペドロから消え、いかなる共有地が現れたのが。

そして第二の課題に接続しよう。タックスらの展開した人類学は、この湖南のサン・ペドロ「未開社会」をどのように書き込んだのだろうか。

第3章 人類学者たちの観察

1 ロサーレスの報告書

それは私たちのやってきたことの、たんなるコピーを遙かに超えるものだった。

（タックス）[Tiii]

ロサーレスの報告書には³²⁾、巻頭にタックスがロサーレスに指示した調査項目、巻末に調査期間中の彼らの往復書簡が付いている。そこで指示された調査項目とは、本論冒頭に述べた、タックスがロサーレスとパナハッチェルで行った調査項目とほぼ変わらない。報告書は「オリジナルにほぼ等しい」とあり、タックスは「最も重要な削除項目」を、地図、センサス、家系図の類と、大部分の公表できない訴訟の記録としている³³⁾ [Tiii]。調査は1938年1月からの一年間（実際には一ヶ月延びた）と、最初から決まっていたようだ。

以下では、各々の記述において、サン・ペドロ社会とはいかなる地のうえに展開しているのか、これに注意しつつ興味深い点を挙げてみよう。

ロサーレスが最初に着手したのは、家系図作りだった。南部地域との密な親族関係は以前より知っていたようで [R927; T7; T928]、南部地帯を「コスタ（海岸、の意味）」として外部の（他の山村などと同じ）一村落と同じく項目立て、その両者間での親族関係を外部村との一形態として統計取っている。

だがそれで「コスタ」が“他の一村落”として収まったのか。遺産相続の三件をしてみる。

一件目は、（おそらく19世紀末の先々代頃は）中流だった。だが村内にあった土地は代を経る毎に細分化し、父の時には猫の額ほどであった。そこで息子は、「これでは足りないと南部海岸部に行った。そのクツァンにはまだ共有地があり、そこにトウモロコシや他のものを植えたり、またそこで家畜も飼って遠くに商売に出掛け、財を増やしていった [R103]。今では、サン・ペドロとサン・ホアン両村にかなりの土地を持っている。二件目は、かつては貧乏だった。南部で働いてチカカーオに土地を買うが、国家によって接収されモカをかわりに1カバジェリーア受け取る。同じ轍を踏まないよう、川沿いの好条件の土地を探して登記した [R116-117]。そして三件目。先々代から先代への相続時は、村内に中程度のトウモロコシ畑があるのみであっ

た。だが、その分割の翌年（年不詳）に「役場から通達がきた。すべての村人にお金を供出せよというもので、クツァンにある共有地の分割を実施するためであった [R128]」。そこでこの一家は、クツァンの土地を購入した。三つの例のうちこの最後の家の土地が、もっとも断片化してサン・ペドロとクツァンの両方に散在している。

地図作成も、早い段階から着手していたのだが躓いていた。技師によって正確に作られた地図の存在はわかっていたが、役場が見せるのを断ったのだ [R932]。結局、自力で地図作製に取りかかったのだが、（報告書では削除されたとはいえ）書簡をみる限り、かなり緻密なものを順調に完成させたことが伺える [R932; 933]。住民が協力したからある。ロサーレスが近しい世帯の土地を測り始めたとき、それが噂として広まった。多くのサン・ペドロの人たちが彼によって調査をされることで、正確に測量された自分の財産を知りたがったのだ。ロサーレスが測量依頼時に説明をしなくても、向こうが先に知って待っていた程であった [R931]。

このように、ロサーレスの調査時とはまさに、サン・ペドロにおいて25年からの現地での土地の登記法制定を経て、猛烈な勢いで土地が測られ登記されていたのである³⁴⁾。あるいは、このロサーレスの調査の測量そのものが、それをさらに決定づけたかも知れない。

訴訟・裁判に関する記述には、村単位での土地をめぐる衝突が三件記録されている（一件は他諸村間なので割愛）。以下にまとめてみよう。

1. サン・ペドロとサンティアゴ・アティトランとの境界をめぐる争い　すでに七から八年もめている。両村の境界付近にある係争の地は、サン・ペドロの人たちがタイトルを持っていた。そこはトウモロコシ畑に絶好の地であり開墾しようと訪れたら、サンティアゴの人たちがすでにトウモロコシを立派に育てていた。そこで衝突が起きた。両村長が境界で話し合いで解決しようとしたが無理で、事態は県庁のソローラにまで上げられた。結局、そこで技師の測量したサン・ペドロの証書に対して、それらを提示できなかったサンティアゴの負けとなる。今ではサン・ペドロの人たちがそこを所有しているが、それでもサンティアゴの人たちの不満は多い。
2. サン・ペドロとサン・ホアンとの争い。この争いは古い。昔からサン・ホアンの人たちはムラの伝統行事の出費をまかなうためなどに、サン・ペドロの人びとに土地を売ってきた。登記もまだ普及しておらず、したりしなかったりだった。たくさんのサン・ホアンの土地がサン・ペドロのものになっていた。貧乏になったサン・ホアンの人たちは、売った農園に出掛けて嫌がらせをしたりなど、両者緊張は高まっていた。1921年、サン・ペドロに地震が起き、家屋の半分以上が灰になるということが起こった。証書があるうと灰になったと思ったサン・ホアンの何人かがこれに便乗し、ここは買った・買っていない、この土地はここまで・そこまで、この支払いは済んだ・済んでないなどと揉めはじめ、いくつもの個人間で暴力沙汰にまでなった。何とか分配を技師と役場が行い、一応摩擦は沈下した。今度はサン・ペドロの人たちは完璧な証書をつかった。するとまた昔と同じようにサン・ホアンの人たちは、再び土地をサン・ペドロの人たちに売り始め、いまでは再度、サン・ホアンの優良農地の大部分はサン・ペドロのものになっている [R134-135]。

21年を発端とするこの衝突もまた、25年の土地登記法に影響したと考えられる。ゴンザレスはサン・ペドロにコーヒーを導入してすぐさま、サン・ホアンにも農園を拡張している。サン・ペドロやサン・ホアンの地価は30年代から60年代にかけて十数倍から二十倍に高騰した。

タックスの当初の指示[T5-6]では、農業栽培技術に加えて、作物選択、農地選択なども調べるはずだった。だが報告書には技術関連の記述のみがある³⁵⁾。これは削除されたというより、ほとんど未着手に終わったと思われる。書簡にはほとんどこの作業を進めた痕跡がない。ただ、次の一文のみがある。

パナハッチェルのように家計簿を作るのは困難です。パナハッチェルでは他人のために働きます。ここでは借地や自分の農地に自給用にトウモロコシを植え、他人を使って働かせ、支払いをトウモロコシか日給20セントですませます。結果儲けているのかなど解りません。多くが穀物を持っていて他人のために働く必要がないのです [R934]

報告書に現れる家計簿はただ一世帯のみ。支出に関しては、八頁に渡ってスプーンひとつの購入まで細かく記載されている。そして最後にセクション毎の総計を出してそこから年の総支出を書く欄だけが手書きであり、何度も何度も計算し直されている。総支出が190ケツァールになるからである。つまり、年の収入　これは一頁で簡単に収まっているものの、やはり売った犬一匹（25セント）まで細かく書いてある　は、総収入の約半分に息子たちがヨソで働いた賃金として稼いだトウモロコシが43ケツァールと計算され、さらに今年の特別収入つまりこの調査のインフォーマントとなった謝礼（約17%を占める）を含めても、たかだか97ケツァールにしかならないのだ。家計簿作成に至って彼は完全にサジを投げたようだ。

2 タックスの展開

ではなぜタックスはパナハッチェルを対象にかくも理路整然とした論を指向したのだろうか。裏にある彼の問題意識は何か。当著には、先住民社会も同じ資本主義社会なのにこれほど貧乏なのは近代技術の到着が遅れているからだ、といった改良主義的なそれに収斂しているように映る³⁶⁾。だがそこで背景に退いたものは大きい。

対象の人びとの異なった行動原理に関して、彼は著の結論部分で興味深い主張をする。彼は「怠ける先住民像」に批判を向けるのだ。先住民たちの労働条件や賃金が改善されない理由として、彼らは週三日働いて十分なお金を稼いだら、それ以上は働こうとしない　これに対して彼は、少なくともパナハッチェルの先住民はこれに当てはまらない、と主張するのだ。パナハッチェルの人たちは例外的かもしれないが、つねに最も合理的な稼ぎ口を選び移動している、農園に行かないのはパナハッチェルによりウマイ働き口があるからだ、と³⁷⁾。

彼はここで、先住民が近代国家主義での労働者という観点から、新古典派のいう周知の「後方屈曲供給曲線 backward-sloping supply curve of labor」を描くそれとして扱われることを嫌がっている。タックスは、パナハッチェルの先住民が資本主義経済下で完全な右上がりの労働供給曲線を描くことを主張し、そのパナハッチェルの先住民をグアテマラ先住民の下位カテゴリーにおいた。このことで論に呼び込まれたのは、パナハッチェルの先住民とは異なった行動様式を取る先住民であり、ロサーレスを理解不能に陥らせた先住民たちである。だがこれは、「怠惰だ」という理由で抑圧されている先住民ですである。何度も支出を計算し直し頓挫したロサーレスに対して、先住民たちを結果的な曲線の傾きにおいて理解し切ったタックス。ロサーレスが悩まされていた、対象社会の輪郭が現実の観察のなかで綻びるその綻びを、もはや論で

は触知できないところまでタックスは後退する。

3 タックスとフランク

以上を踏まえ『1ペニー資本主義』から四年後の論文Tax(1957)³⁸⁾を取り上げる。ここでも依然として経済合理主義的解釈は固持されている。だがこの時、批判はブーケBoeke, J.H.らの二重経済論に向けられる。タックスはこの二重経済を完全否定するのだ。ならば先の批判的問題意識は、この論文ではどのように展開されたのだろうか。

当時、『経済発展と文化変容』誌では、インドネシア経済の特集号が組まれ大々的に二重経済論モデルの実証が試みられていた。これらに向かってタックスは批判する。幾分乱暴だが、ここに次の三点を抽出してみる。

- ・先住民経済は、決して資本主義経済の外側にあるのではない。
- ・先住民経済は、国家経済が発展することへの「お荷物」ではなく、むしろその犠牲者である。
- ・先住民経済が、資本主義経済にすでに内包されている、というのは、グローバルな市場での商業経済のシステムに内包されている、という意味である³⁹⁾。

二重経済の否定からこの三点への論理展開 今日となつては馴染みの深い、あるひとつのパースペクティブが浮かび上がる。フランクによる新従属論のそれである。

フランクの膨大な書かれたもののなかで、理論的にタックスに負ったことを示す部分は筆者の知る限りない。しかしこの時期とは、フランクが新従属論テーゼを導く直前で、両者とも同じシカゴ大学に所属し、そしてさらにフランクは、当時いわゆるシカゴ学派とウマがあわずに社会学・人類学に興味を抱いていた頃である⁴⁰⁾。彼は大学院時代より、レドフィールドらの研究室のあるフロアーにしばしば出入りし意見を交わしていたと述べている⁴¹⁾。タックスとは、友人の人類学者としてインドシナ戦争のゲリラを学的に支援すべく彼に『現代人類学』の編集者になるよう意見する個人的関係にあった。

なにも筆者はここで、知られざる学説史をスクープしたいのではない。眼目を先に言う。新従属論に対して後年向けられた諸批判とは、タックスがああ湖でパナハッチェルを切り取ったときに既に内包されていたのではないか⁴²⁾。

フランク批判ならずすでに周知の通りだ。フランクは複雑な生産構造を目の前にして、理論的整合性を取るべくそれらを無視したため、実際には理論的に遥かに後退していくこととなった。ゆえに生産様式に関する分析が不十分だと噛みついたラクラウの周知の批判は、フランクにしてみれば確信犯なのである⁴³⁾。

フランクが確信犯ならば、彼は先住民問題を完全に放棄したことをも認めなければならない。そしてこれがタックスの問題でもあると言いたい。57年の論文では多様な生産関係を軽視し強調を交換関係のレベルに限定することで、先住民が異民族として「怠ける」「遅れた」「教化」の対象となっている労働動員下での抑圧を完全な対象外としたからだ。

4 「モラル・エコノミー」認識の対象化

ロサーレスの報告書 / 『1ペニー資本主義』 / タックス57年の論文 この三本を時系列的

に並べるならば、我われはまたその裏に、同じサン・ペドロの報告書／「閉鎖的集合農民共同体」／ポール68年の論文あるいは「モラル・エコノミー」論という流れをも視界に収めるべきだろう。それは裏表だからだ。ある対象社会に、こちらとは異なって完結した規範や行動様式をみいだすことそのものを、我われは再検証すべきである。論争として対立的関係になり得るのは、両者とも対象が同じ位相にあり、同じ範囲にあり、同じ枠で切り取って並置できてこそそのものだ。ただウルフはいう。「農民共同体の性質 kind は、共同体そのものの境界内というよりはむしろ、共同体の属するより大きな社会に内在する諸力に、呼応したものであるようだ⁴⁴⁾」。つまりこの論文で彼は「閉鎖的共同体」を、征服以前からの先住民社会の本質的属性としてではなく征服統治のための歴史的産物として設定していたのだ。だが 多分に彼がこの論文においてすでに中米諸村落をジャバのそれと比較したことが強い原因となったのであろうがこの概念は伝統的共同体というものが閉じた独自のそれとして認識されることへの強い認識論的軸をその後の学説史に刻み込む。だからこの点に関する今日の批判は予想がつく。「グアテマラには、世界中で最も強固な集団的『農民』共同体があったかもしれない。しかし〔中略〕閉じたということはほとんどないのだ⁴⁵⁾」。閉じたように見える共同体とは、決して外界から孤立しているのではなく、外部と内部との相互影響のなかに置かれているひとつの運動に他ならない⁴⁶⁾。

もっともだ。だが、相互影響のなかのひとつの運動としてたてるのみならず、さらに踏み込んで、この“外部と内部の相互影響”という関係そのものの認識もまた問われるべきなのだ。

だから筆者はサン・ペドロをめぐる諸研究にこだわりたい。ポールはロサーレスの報告書より30年後のサン・ペドロから、「閉鎖的集合農民共同体」を過去のサン・ペドロに書き込んだ。冒頭に引用したポールの書き込みには、次の部分が続く。

〔中略〕今日多くの人びとは、南部ヘトウモロコシを自家消費のために耕しに出かけている。大農園主の家畜に必要な牧草と交換に大農園の土地を利用して。〔中略〕新たな必要性に迫られながら、新たなチャンスと道を利用して、サン・ペドロの人たちは以前にもまして旅をしているのだ⁴⁷⁾。

ここで現在から投影された枠こそをが、対象化されるべきなのだ。サン・ペドロの人びとが山を降りるのは昔からそうして暮らしてきたからであり、それを「村を出て山を降りる」移動として意味をみいだし、内-外の相互作用と、それを生き抜く共同体なる内を見いだしたのは、ロサーレス自身が行政区画とともに南部を切り捨てたその恣意性に起因している。観察者がそのように括りだした「閉鎖的共同体」なるものを、(そしてその同じ恣意性によって同時に分節された)外からの力に対して、主体的なポジションに据えただけなのだ。それはたんなるイデオロギー的な立場選択の問題である。スコットの『モラル・エコノミー』が、斜に構えてみれば完全な反乱鎮圧マニュアルに映るのは、じつは論理的に正しい。この一点において、新従属論が論理的結論として革命にしか行き着かなかったことと理論的等価にある。

アティトラン湖湖畔エリアを眺めて、対象がその両極間のどこにどのように位置するのかが、筆者の関心外である。それらは、少なくともグアテマラにおける先住民たちが経験してきた被抑圧的な歴史の力を、学の問題として論じる可能性があまりにも薄い。

繰り返す。モラル・エコノミー論争そのものを成立させるための諸条件こそが、まず問題なのだ。

5 おわりに

それら両極がダイコトミーとなりえたそのサン・ペドロという地は、どういう歴史的展開の真っ只中にあったのか。なにも“筆者こそが実は客観的かつ詳細な現地調査をした”などと言いたいわけではない。このダイコトミーのいずれもが、アティトラン湖湖畔エリア サン・ペドロで本論が例解したように、すでに国家によって測量が完了し、先住民たちを定住民として登録する条件がすべてそろった地に展開している。それは国家と国家市民として登記された者たちの視点である。そして両極はこの視点から観察された。だから、この視点が現場で成立するかが、現地調査を成立させる諸条件と深く関係している。

少なくとも、ホルヘ村長の暴政期この地域に外部者が調査に入れたか。ロサーレスのきわめて固有な経験を思い返す必要がある。ホルヘ期、つまりカブレラ独裁政権期にはセンサスすら国家機密に引っかけたという⁴⁸⁾。1931-44年のウピコ独裁政権期には、地方市町村の行政ボス jefe político を、政府が任命した外部者 intendente に就かせることが決められていた。カンシアンのような批判⁴⁹⁾を承知のうえでいえば、アダムスのような⁵⁰⁾、このインテンデnteをはじめとした外部者によって社会にヨソ者の進入回路を準備する契機が、少なくともサン・ペドロにはあった⁵¹⁾。

ロサーレスはタックスらと出会う前に三年間、サン・ペドロで先生をしていた [Tiii]。彼が調査を歓迎されたのは、こうした下準備と深く関係している。先住民でありながらカクチケル語やツトゥヒル語を操るこの先住民グアテマラ人。そして何よりもスペイン語を話すことがこのサン・ペドロでは生き得た、これが最重要である。のような「下準備」ができた媒介者なくしてカーネギーのような研究計画は可能だったのだろうか。

そして最後に、1960年からのグアテマラ内戦と反乱鎮圧の問題があるだろう。内戦下の先住民弾圧が最も激しかった80年代初頭、軍が採った方法とは、先住民を共同体ごと焼き払い、そのリーダーを理由もなく虐殺することであった。ではなぜかくも先住民は、その生活の基盤であるとされていた共同体を捨てて逃げ回れたのか。

じつは「逃げ回れた」という認識そのものが恣意的にみいだされた抵抗なのではないか。共同体という社会の枠組みを、彼らの社会にあてはめるその恣意性こそが、サン・ペドロの人びとの南部との関係の特徴的に意味づけ、不可解な行動として分節してはいないか。

ならば対象サン・ペドロを南部にまで拡大すれば正確になる、というのは自己矛盾である。あまりにも現在のグアテマラは当時から当然変わっているのだし、整然とした理論へと捨象されてきた概念。荒蕪地こそが、“抑圧される先住民の断片的流動的抵抗”という修辞となる毎日を柔らかく支えていたはずだからだ。

その毎日を学が想像できるようになるのは、まだまだ先のことだと思う。

注

1) Tax, Sol. “Penny Capitalism, A Guatemalan Indian Economy”, Smithsonian Institution, Institute of Social Anthropology Publication, No.16, Washington: United States Government Printing Office, 1953

2) *ibid.*, p.ix

3) Schweigert, Thomas. “Penny Capitalism : Efficient but Poor or Inefficient and (Less Than) Second Best?”, *World Development*, Vol.22, No. 5, pp.721-735, Great Britain : Nuffield Press Ltd., 1994, p.721

- 4) 現代経済研究会編,「季刊 現代経済」, Jun. 1972, No.5, 日本経済新聞社, 224-227頁
- 5) Wolf, Eric R. "Closed Corporate Peasant Communities in Mesoamerica and Central Java," *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol.13, No.1, 1957, pp.1-18
- 6) *ibid.*, p.1
- 7) Scott, James C. *The Moral Economy of the Peasant, Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*, New Haven: Yale University Press, 1976.
- 8) Popkin, Samuel. *The Rational Peasant*, Berkeley: University of California Press, 1979, p.4
- 9) Wolf, "Closed Corporate Peasant Communities," *op.cit.*, p.1; fn.2
- 10) これ以上の情報はまったく分からないが、ロサーレスはタックスの同僚からカクチケルの読み書きを国際音声記号（IPA）で学び、その後数ヶ月でカクチケル語で約千頁になるテキストを書いている [Ti]
- 11) Rosales, Juan de Dios. "Notes on San Pedro La Laguna," *Microfilm Collection of Manuscripts on Cultural Anthropology* No. 25, Chicago: University of Chicago Library, 1949.（なお、本論を通じて [Rxx-xx] とは、ロサーレスによる記述の報告書における頁番号を、[Txx] はタックスによるそれを指す）
- 12) Paul, Benjamin. "San Pedro La Laguna," Flavio Rojas Lima y Sol Tax, eds., *Los pueblos del lago de Atitlán*, pp. 93-158, Guatemala: Seminario de Integración Social Guatemalteca, 1968.
- 13) *ibid.*, pp.152-153
- 14) McBryde, Felix Webster. "Cultural and Historical Geography of Southwest Guatemala," Institute of Social Anthropology, Publication No.4, Washington D.C.: U.S. Government Printing Office, 1945, p.91
- 15) Cortes y Larraz, Pedro. "Descripción geográfico-moral de la diócesis de Goathemala," Prologo del Licenciado Don Adrian Recinos, de la Sociedad de Geografía e Historia de Guatemala, Volumen XX, Tomo II, Guatemala: Biblioteca "Goathemala," 1958, p.162
- 16) McCreery, David J. *Rural Guatemala, 1760-1940*, California: Stanford University Press, 1994, pp.161-163
- 17) "Recopilación de las leyes en Guatemala," tomo 10, año 1891-1892, Guatemala, pp.238-239および*Recopilación," *op.cit.*, tomo 8, año 1898, p.24
- 18) McBryde, "Cultural and Historical Geography," *op.cit.*, pp.90-94
- 19) 本論において引用した聞き取りは、2001年初頭に筆者がサン・ペドロで行った。すべてインフォーマントはサン・ペドロの先住民男性である。筆者の調査をはじめ詳しくは中田英樹、2003、『ラテンアメリカ先住民社会への換金作物の浸透と地域変容』、京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻、博士（農学）第1314号を参照のこと。
- 20) McCreery, *Rural Guatemala*, *op.cit.*, pp.243-245
- 21) McBryde, "Cultural and Historical Geography," *op.cit.*, p.94
- 22) "AGCA, Sección de Tierra," "B", leg. 28670, exp. 333, folios 1, el año de 1879
- 23) "Recopilación de las leyes en Guatemala," tomo 4, año 1883-1885, Guatemala, p.789
- 24) "Recopilación de las leyes en Guatemala," tomo 22, año 1903-1904, Guatemala, pp.183-184
- 25) "AGCA, Sección de Tierra," "B", leg.28670, exp. 266, fol. 1, el año de 1879
- 26) ロサーレスの報告書でも筆者の聞き取りでも、このホルへの家族はこれ以降でてこない。地元ではこの口承のように、おそらく彼もクツァンに移り住んだとされている。
- 27) 第一項だけをここに引用しておく。「当事者は引き続いて、サン・ペドロ・ラ・ラグーナ当局に対して、二人のサン・ペドロ在住の証人が明言できること。この証人は、三十歳以上であり、申請者は〔登録したい〕その不動産を、十年間、何の衝突もなく所有していることが、公で認められていること。そして少なくとも、その区画が、現在進行中の法的訴訟にかかっていないこと」("Recopilación de las leyes en Guatemala", tomo 44, año 1925-1926, Guatemala, pp.430-431)
- 28) Paul, Benjamin. 1968. "San Pedro La Laguna", *op.cit.*, pp.99-100, また、筆者の聞き取りでも「はじめ

に持ち込んだ人間」として彼は多くの者が言及した。

- 29) サン・ペドロの先住民素朴画家たちが度々描く、コーヒーの摘み取りと火山と湖の同時に描かれた絵が、実は南部大農園での重労働の歴史を経たうえでのサン・ペドロそのものの先住民文化として描かれていること、そしてこれが当村では観光の眼差しのもとで成立し得ていることを、古谷は十分に論じていない(古谷嘉章、『異種混淆の近代と人類学』, 京都, 人文書院, 2001年, 238頁)。絵画という瓶に投げ込まれた被抑圧的歴史の経験という通信を画家たちから読み取ろうとする古谷に筆者も共感するが、この論はサン・ペドロの先住民を先住民一般の下位に措くために、当地の歴史的文脈を踏まえつつ画家たちの現在の交渉を論じるものではない。いわゆる「戦略の本質主義」を古谷が意識するならば、その概念の最重要主張のひとつ 現場の固有性を鑑みる は、どう考えればよいのだろうか。拙稿(2003)の終章はその試論である。
- 30) “Recopilación de las leyes en Guatemala,” tomo 53, año 1934-1935, Guatemala, p.527
- 31) McBryde, “Cultural and Historical Geography,” op.cit., p.93. なお、当著もタックスらの報告書の一環ならば、(引用には気を使ったが)史料として対象化するべきである。ただこのように彼の視点も南(下)から北(山間部)を眺めるというものであり、十分な紙幅が得られたときに併せて論じることにする。
- 32) ざっとどのような項目が実際に報告書で扱われたかを羅列しておく。()がおおよその頁番号。
- ・家族関係とその宗教(1-50)
 - ・村内職業(50-100)
 - ・遺産相続の例が数件(100-130)
 - ・訴訟の例(130-240)。これはサンティアゴ・アティトランとの土地をめぐる争いなどから、金銭をごまかした、離婚した子供に勝手に会いに来た、などさまざまである。
 - ・技術。織物、食事、家屋建設、そして農作物や家畜など、多岐にわたる(240-340)
 - ・風習、習慣。生まれて洗礼して結婚して出産して葬式して埋葬する。そうした習慣が事細かく書かれ、続いて(とりわけ衣服などで)世代間や性別間での変化が観察されている(340-400)
 - ・父子、母子、兄弟、叔父と甥といった間での関係の説明(400-425)
 - ・信仰や迷信の記述。この世と来世の考え方、身体の各部分の意味、歯痛や頭痛時の対処法(425-500)
 - ・Ethno-Naturales, Ethno-Botánicas, Ethno-Zoologicaなど(500-650)
 - ・古い言い伝えや呪術師の話(650-730)
 - ・ムラの宗教政治組織の役員一覧(730-770)
 - ・口承の昔話(770-930)
- 33) 往復書簡の日付はさして飛んだところもなく、大幅な改ざんはされていないと思われる。往復書簡に記された、ロサーレスからタックスへと約半月毎に送られた収集データの内訳と、当報告書の内容を付き合わせても、このタックスが断った削除部分以外に、大幅に削除された資料はないと思われる。
- 34) 1927年にチカカーオのある土地が、チカカーオとサン・ペドロとのあいだで裁判にかけられている(“Recopilación de las leyes”, op.cit., tomo 47, año 1928-29, pp. 609-610およびp.654)。結果、半分ずつを両村の貧民に分け与えることとなった。その面積は「それぞれ32クエルダずつ」と桁違いに小さい。
- 35) 農業に関しては技術的なものに限られているとはいえ、「最近始められた」コーヒーについては半頁、トウモロコシに関しても僅か二頁である。それを燃やして儀式に、豆は粗末にするとバチが当たる、などであるが、これらに南部に関する言及はいっさいない。
- 36) 例えばibid., pp.28-29. この技術改善と先住民経済発展の正の相関関係は、後の論にも強く引き継がれている。Tax(1957), 節を参照のこと。
- 37) ibid., pp.204-205
- 38) Tax, Sol. “The Indians in the Economy of Guatemala,” *Social and Economic Studies*, Vol.6, No.3, pp.413-424, Institute of Social and Economic Research, University College of the West Indies, 1957.

39) *ibid.*, p.414-415; p.417

40) 彼の研究歴をまとめてみる。

1950年に彼はシカゴ大でPh.Dの取得を試みるが、シカゴ経済学派に合わずミシガン大学へと行く。厚生経済学の論文で高い評価を得てシカゴへ戻るが、評価は低いままであった。53年には助手のポストを得てシカゴで研究を始める。58年から三ヶ月、MITの国際研究センター（CENS）に客員研究員として赴任し、ロストウW.W.Rostowたちと出会う。ちょうどロストウが『経済成長の諸段階』などを精力的に執筆していたときである。また一方でこの時期に、ギアーツGeertz, Cliffordの『農業インヴォリューション』を評価しその序文を執筆する。61年よりアフリカに行くが、その現実には彼にじっくり来ない一方、キューバ革命以降のラテンアメリカに惹かれる（以上、Frank, A.G. “The Cold War and Me”, *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Vol.29, No.3, 1997）。そしてフランクは1966年、『マンスリー・レビュー *Monthly Review*』誌、第18巻第4号において新従属論の原型となるパースペクティブを提示する。

41) Frank, Andre Gunder. *ReORIENT: Global Economy in the Asian Age*, Berkeley, California: University of California Press, 1998, p.xvi. (山下範久訳, 「リオリエント アジア時代のグローバル・エコノミー」, 2000年, 東京, 藤原書店, 邦訳22頁)

42) 新従属論のパースペクティブを構成することとなる諸学派として、もちろんのことプレヴィッシュ Prebisch, Raulに代表される従属論があることはいうまでもない。そして脱稿直前に崎山政毅氏より、プレヴィッシュの貿易論的な「不均等＝従属関係」批判の根幹にアウトルキー設定が絡んでいるという指摘をいただいた。いわゆる「急進的」新従属論がその産みの親であるプレヴィッシュの「従属論」とのあいだに「たいした相違はない（レーヴァー, 「周辺資本主義」所収, 邦訳143頁）」のならば、新従属論的パースペクティブが初発からもうひとつの深い認識論的な轍を孕んでいるのだ。期を改めて取り組む。

43) 新従属論への優れた批判的総括としてここでは、Limqueco, Peter and Bruce Mcfarlane (eds.). *Neo-Marxist Theories of Development*, London: Croom Helm; New York: St. Martines Press., 1983. (若森章孝・岡田光正訳, 「周辺資本主義論争」, 柘植書房, 1987年) 所収の各論を参照した。

44) Wolf, “Closed Corporate Peasant Communities”, *op.cit.*, p.7

45) Smith Carol. “Conclusion : History and Revolution in Guatemala,” in Carol (ed.), *Guatemalan Indians and the State : 1540 to 1988*, pp. 259-285. Austin: University of Texas Press, 1990, p.282

46) Handy, Jim. *Revolution in the countryside: Rural Conflict and Agrarian Reform in Guatemala, 1944-1954*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1994, pp.17-20, を参照。

47) Paul, Benjamin. 1968. “San Pedro La Laguna,” *op.cit.*, pp.155-156

48) McCreery, *Rural Guatemala*, *op.cit.*, p.410, footnote no.32

49) Cancian, Frank. “Political and Religious Organization,” in Manning Nash ed., *Social Anthropology, Handbook of Middle American Indians*, No.6, pp.283-316, Austin: University of Texas Press, 1967, pp.293-296

50) Adams, Richard N. “Ethnic Images and Strategies in 1944,” Carol A. Smith (ed.), *Guatemalan Indians and the State: 1540 to 1988*, pp.141-162, Austin: University of Texas Press, 1990, pp.141-143

51) ロサーレスの報告書にも次のようにある。「1935年に各市町村に中央から送られた外部者の長によって内部の村長が失墜し、住民のなかに村の組織への奉仕よりもスペイン語を話せる能力のほうが重視されてきていた。さらには同年制定されたコレジェーロ労働者 *correyeros peones* という賦役 ^マ これに従事している間は村の公役が免除される ^マ と類似の効力を持った自発的参加運動 *campañía de voluntarios* も、その旧権力の失墜を加速させた」[R744]